

2017年度 韓国社会福祉学会春季学術大会報告

韓国社会福祉学会春季学術大会での研究発表を終えて

古川 隆司
追手門学院大学

今回、韓国社会福祉学会大会での研究発表の機会を頂いた。私の報告テーマは「被害者支援にみる司法領域でのソーシャルワークの貢献」であった。これは、昨年の学会大会の自由報告分科会での伊藤会員・大岡会員の報告から刺激を得たものである。また韓国の研究者・実務家と交流のある司法福祉領域で私が研究していることもあり、更なる学びを得たいとの動機で応募したのであった。なお私事だが、翻訳出版されている執筆に携わった『災害福祉とは何か』の入手や、大学院時代の先輩や同窓生との再会も期待していた（結局再会はかなわなかったが）。

大会では、発音が覚束なかったが韓国語で口頭報告し、英語表記も加えたスライドで補った。のち指定討論者の취 윤정教授（목원大学）からコメント頂いた。被害者支援団体の情報提供や研究内容への前向きな評価を含め丁寧な内容だったが、事前に発表内容をお読み下さったのコメントは、他の発表者に対しても一人ずつ指定討論者を設けるのは、日本の学会と大きく異なる点だった。またフロアからの質問も頂けたが、質疑応答には日本への留学経験がある方が通訳を務めて下さり、円滑に討議と情報交換が行えた。その中で、拙著を翻訳した研究者とも出会うことができた。帰国後出会った方々と研究交流も始めている。セウォル号事件など今なお解決しない被害者の支援は、専門的に取り組む研究者実務家の量的充実が必要だが、何よりソーシャルワークが向き合う課題という点は、日韓の学会ともにコンセンサスを得るものだと確認できたのも大きな意義であった。

なお参加準備は、自分で作成した韓国語の原稿を同僚の韓国人教員に原稿チェックを得るなどした。かねて語学の勉強はしていたが、専門的な内容は改めて学び直す事も多かった。たとえば概念の違いは決定的だ。被害者を生む原因は、日本なら事故・災害もありうるが韓国は「災難」であり、ニュアンスや用語法は参加して学んだことが極めて大きかった。また、国際学会と異なり日本と同様の学会運営だから、初めて海外学会に参加する会員には好条件だと感じた。だが、韓国では日本語を話せる方が多く、その逆が少ない事は残念に思う。学際化した福祉研究は、両国が互いに学び合うテーマも多いことも今回の発見だった。

最後に機会を頂け、その準備を頂いた両学会事務局に御礼申し上げたい。